



魂系



五世吟

揚子江の秋の燈籠小

花子

辞世

秋の燈籠小
秋の燈籠小
秋の燈籠小

英一
英一
英一

歌州花中舞江草子去々
とれふらぬのひらぬとじ
ふらぬの道真舞の年一舞
ひまふくぬぬ三百年の句
有案の年一舞一とく
新く舞の秋の舞舞の舞

一舞の舞をひらぬとく
ささふらぬの舞舞親女
乃舞の舞の舞の舞舞
私の舞舞の舞の舞舞
舞舞の舞舞の舞舞舞
まふの舞舞の舞舞舞

家——あゝあゝ秋葉の
を海もさな——海もさな
たのたの

巽離と祭

海もさなとよひさ宮と陽燈籠 永機

魂祭

伴路やあ加茂や市の魂まつり立琴子

奇仙

素麴をいづきの流る魂祭	岷幣
山——鮎賣乃味とゆく門	永機
秋あけやあお男好とあさく	文十
菖——踏こむ木の下小腸	芳里
味噌巻と舟待海と朝の月	車葉
籾り吹くつと魚魚	恵風
踏者流——さ——さのさき窓	玖十

○内見(内見)

織造ふりしの母ふき終も 木耳
 くらんううう十人弄の車打し 少芽
 柳町やまはぬおきおあまや 敬由
 かの器誰ヶユの 角燈口 頁十
 垢離のこまの忠綱まけく 茶井
 折あぶの証まけくせきく登り月 露柱
 くらん尾の車も情しむ器立 椿十
 護ゆうう香うくのウ乃あう痛あ 露人
 松戸まけく印あ流のがし路 執筆
 根撥く入江まむう比良のち 木耳

○長夜

○気候のりみ

○送権のりみ
火のふき炬燵こや
人をもくん(冬)

舟ううう車よ飛き藤の彼志 湖十
 西くうみあ忍まへうあ中日 海市
 小坂うまじの比度々あり 車葉
 大刺くゆわく嵐の通り后 永機
 宿軍やうう子名乃丸強 火芽
 膠まき先へうらむら路痛拍 芳里
 山よあまうう慈悲心とせし 露柱
 運び雨を根ああひの明もあせ 敬由
 借りよ袴の九十川丈ヶ 文十
 掃出くく巨燵と遠く縁やう 湖十

英名所ふくまき人を魂奈 百洲

魂奈

魂柵や大工の子よもいふ法は
ぬれく干波ののこ炭や魂奈 一漢
超波

全

草の多き硯見ゆも魂まつ甲 貞磨
多柵下波の火燧身 細浮 蓮雨
うらぐやうらむらむらむらむらむら 青花
格式や女房よあし魂まつ了 泰渭
挨拶とまじりぬまつふくまき 桑雉

海鹿草はまき草の常やあへ乃家 欣洲
魂まつふ草あ六合に満ちりふ 松葉
盤形をまきよあまら魂まつ甲 鷺竹
よ海まつ草よ白の胃はくはる 三花
魂柵や目利し草を業生郷 雨調

全

魂柵のぬしや葉に浮くあ乃玉 青葉
先まねぬ先へ追ひや魂まつ甲 木十
ひやうきよ追り燧筆やも而物 桐鳥
引くよ所の糸口魂まつ甲 桑路

分ちし路も新忍あり川魂糸
路十
迎ふ火や在りおとれた家の流
可文
身はあふたふしとる魂糸
夏嶺

魂祭

柳徑のうし路あつる旅子の南
午寂
草売火やふししの青ふ似たりふ
素丸
あふも人むす乃のふを魂糸
楚砒
古笥の乾くふをふし魂まつり
常柗
遍照よあのをせや賣に草笠小
百菴

全

船路の天竺味し魂まつり
長水
馬退ふや女を肉平魂糸
桂夕
冥柳下源在ふ乃小流
半雪
うめくし柳徑よる小泉川
千林
旅文と噂ふ揚屋のふまはる
長川
くは人や笥笥のくしの冥糸
水聲
魂まつり外垣電珠や舞音
十聲

全

路江を新踏鴨わし魂まつり
可圭
うき房やる柳草乃新餉
衣芳

草尾草や高のふね 菖
 八木屋の子六 けしや魂系 素
 手向う田中川舟を魂まつま 催種
 原まゝくま 中庄のほしや鳥鶴橋 大澤
 之の葉と鶴鶴やう向くこぬ糸 丁固
 公時を糸糸くたむる吳まつま 水雅

魂祭

雨雲の影根がまきかや焚きさう亮 風葉
 着病や魂まつま けし女屋おれ 蓮之
 屏尾柳やぬふまじあ の門を誰 咫尺

魂まつま 由紀の板子 蓮夢 壺月

全

魂柳や泊り筏 けし 安士
 市草のちろと 藤葉や 青蘆
 吳柳を 押ま 半鱗

魂まつま 日や加藤川と 奇の父 調柯
 ちろと 告るよ 常り柳の 羊素
 葉や 一と 舟人の 舟を 水楚
 瓢 ちろと 倉ま せぬ 魂まつま 玉牙

歌の父 宮内侍
 歌の父のちろと 故人
 徳田か田名をよと 諷
 徳田のちろと 其山の井の
 徳田か 歌の父
 名つりまゝなりと
 下人 是 舟に この二歌
 一は 舟 舟 舟 舟
 一は 歌の父母のちろと

証とくし居店とのや魂まつて
魂の座を扱乃丸留よりや溪
と御まつりむとくも物の子樹う南
魂とふやとくもふし雨の琴
買柳やみつし内あると十二克
塵江
自主
樗山
雁志
五山

魂祭

魂とくもあやとくも瓜の足掛
槿の柳あつとくもとくも
十のふしとくもとくも大茄子
草あつとくもとくも魂の柳
青條
傘車
和交
仙水

奇仙

茄子とくもとくもや車乃一のり
雨知るもとくも名物月あつとくも
まの路とくもとくも穀草とくも
あ吾はひあやとくも仕也とくも
奉書おとくもとくも土の弁
二十年中鶴とくもとくも地
世とくもとくもとくも
椿井
永機
盧兆
蘭里
紫満
籬究
社良
登雪

謎付
炭めきいえ
前より銘の尻
のいりまこ

八店注 出店の敷きありふり
 和尚乃 律儀まき蓋と
 河の敷き幕も通そ郭公
 ありまを律儀乃河
 ありまの尻はしり判店取う家
 むろの細今の福う記
 いりめとや幕乃 籠を運び馬
 山薬代 星の金次
 永里 且中 永尾 湖十 猪鷓 貞孚 十花 永路 銀巴 永丈

の言が

扇ふりや小幅ゆへ乃山綿着
 障子とて減負さの河原め
 讀ほゆ小書々ぬり控撥家志と
 拳乃由平と浪屋町志
 けくくゆ所種へ足跡あへ下地
 か大名ととふ坊極
 軒と乃とらあきり子小際虎落
 味噌樽めふく鐘鳴市終
 山小いそ海月ち撥撥莞赤と
 天狗の周と帆柏小賣ま
 永里 永丈 盧兆 貞孚 紫滴 盪雪 杜良 籬窈 椿井 蘭里

西の月をみれば 永路

る麻ふらふ 猪鶏

ナリ 屏風を 暈雪

何れも 十花

世よつ 永里

李白詩集 永丈

ある日の 且中

既よ 永尾

魂祭

〇曰、瀧後寺のま

あつてまをのり

〇所 不忠の御蓮舟と
定永寺(定永通宗)左前(清能三巻二巻)

魂まつるうたの 花遊

秋茄子や 籬風

全

白州の根より 字十

多ふふを 有峨

冥柳や 舎十

花売と 素十

灯 伯十

あ、千里 鶴十

夢は霞ふくまの冥魂まつり
魂柳の下谷通りやうらまの
朋十
青舎

表六章

魂車新戸内ぬ国のはり
めもり草小袖を借る柳
能いさの管藤を月のあそび
又やあふまの垣柳そり
川舟三四里倦る几や
そり〜續きあふる花のむ
湖十
文英
永機
吏登
淡車
楊蛙

魂祭

よくおめまけの魂の系牛
貞佐

全

柳徑やあかろ有し声のり
あけ〜三日ふゆふや魂まつり
粥翁
梅戸

全

神めくる表〜益ふくまのけし
皆〜子やまの借物や魂まつり
其山
中流

全

炊石と新巻坂乃灯や魂の柳
ふふ〜ぬ表〜ん志り魂祭
菊尋
永十

魂祭

新盆や何さし神の意もあらむ哉
魂まつる人ともさるし柳乃家
冥柳やある林の右じやう
魂柳の下もさるしやむも追ハレ
松羅
文江
泥牛
貞十

いとあまの母

ねをかりて居る水原は

まにけりしとあしあま

しるしあたる衣手(台舟共)

又是より天景一と

とありり(一)香雪の足原
以上随斎語活に透りあり
と下下にりりよむのほへト

全

あまの母とあつりしむらさきや露人

十二下目

あまの母とあつりしむらさきや露人

全

喚響迎月花千祥居る生涯と吾月むも後りく
ふ外八橋のふうきとあやめくよさるし
時子去小し酒の初秋を承の七か年その
余さるし甲斐ふにあやめく
彼美をまつるふよめく
因端く神の海かえらぬ思ひさのかとひの山
草漸く刺るゆるるる

花子にぬをぬらさるるり松乃風 露柱

全

あまの母とあつりしむらさき

一燈を執

よる光りあつりしむらさき 逸志

花千居る名
二十二年十月七日北

魂祭

此まれえおとと柳経地の一寸 登羽
標貫やあうきとれたけあ男 秀羽
しつゝ〜しつゝい天柳の草の若 薄文
魂柳お何うゆ〜ぬと手白水 璋格
あ〜う〜う〜ぬ中や魂まつり 圓々

全

ゆわ自在やう井の原や奇癖のゆさ 是十
十六や蓮のふい牛の袋角 歩鶴

全

魂柳やおいを習し柳上 浮山
丁寧よ忍知はくきり魂祭 堵十
瘦肉をいあ〜し〜し〜天の夜 保十
扇尾柳よ出つらひあゝ魂祭 甯江

全

挑灯を種もあや〜天の如 一葉
花も葉を葉濃と近は葉象 纜柙

全

童を人種解作喜草売急 井石
このり灯をあ〜ぬ草や高燈籠 六花

魂柳の物もや内道^{ちん}の^{ちん}あり 大宮 六出

せぬくともや葉若^{あは}春ふひ^は紛^ま魂^まあり 日 灯雪

冥柳^{みやう}瓜^{うり}包^かめ^めえ^えを^をの^のく^くに^にけ^け 日 井花

魂祭

駕^かの^の何^{なに}柳^{やなぎ}瓜^{うり}編^あむ^む魂^ま送^と 大云寺 一亭

追^お火^ひや^やと^とら^らぬ^ぬく^く蓮^{れん}の^の比^ひの^のけ^け 日 優花

全

僧^{そう}の^のき^きを^を仮^かの^の姿^{すがた}や^や魂^まお^おつ^つま 眉岡 風之

露^{つゆ}ぬ^ぬの^の〜[〜]自^{みづか}他^たの^の疑^ぎ柳^{やなぎ}の^の冥^{みやう}祭^{まつり} 日 卜可

月^{つき}照^ある^るや^や河^か海^{かい}三^{さん}口^{くち}ろ^ろ魚^{うま} 濯 東雨

捨^する^るや^や魂^ま柳^{やなぎ}下^{した}の^の大^{おほ}冬^{ふゆ}瓜^{うり} 毛江

と^とし^しぬ^ぬる^るふ^ふ引^ひけ^ける^る魂^ま祭^{まつり} 石峨

全

根^ね〜[〜]葉^は一^{いつ}花^{はな}の中^{なか}柳^{やなぎ}や^や三^{さん}麻^ま耶^や形^{かたち} 吟跡

冥^{みやう}柳^{やなぎ}や^や立^たむ^む供^く養^{やう}の^の跡^{あと}〜[〜] 冥雲

扇^{あふ}ぬ^ぬら^らり^り刻^く筋^{すぢ}子^この^の魂^まあり^{あり}ま 萬江

魂^まあり^{あり}酒^{さけ}の^の香^から^らふ^ふ〜[〜]新^{あたら}の^の松 百壺

門^{かど}並^{なら}や^や糸^{いと}而^を似^に并^{なら}ぬ^ぬ乃^の内 鯉九

魂^ま柳^{やなぎ}や^や河^かの^の心^{こころ}を^をく^く難^{がた}路^ろに 夢園

初まのや名をきく露のぬまつり 排雨

魂祭

あさむねたけ草葉の玉のくんと市 素質
 手くの如く燈籠や魂まつり 車晶
 帷子や後敷き三つぬ 春松
 魂一重紗や念佛も宗の河へ海 白朶
 おかしおかしこ痛の匂いも 九十九
 立まつ雛のこゝし魂まつり 五新
 かくり火やち産霊子の神の露 九十九
 長次郎神小地夢は魂まつり 宇白

母の親志うり法術や魂まつり 巡泉

魂祭

魂柳やあけぬの木多法施 文十
 雨ふとの中子実あり 木耳
 あふくつたおふたねのきぬ糸 芳里
 冥まつ里筆を垢ふ雪らふ 椿十
 くさむのら手くぬり魂まつり 惠風
 口をぬふくくぬ他の手由糸 敬由
 生りあらかくのこたつ冥まつり 少芽
 松蔭一巻の折の魂まつり 玖十

茶塚のらうとやうーや魂糸
者破とぶらう毒所と美糸
車葉 茶井

魂糸

あましくやうまおみとく記茅は盤
いせうに傍えうーや魂糸
あまぬのや板のまサ部ー送り魚
一日らぬーふく毒や美まつ
新まーくまうらぬう燈籠小
魂砌やまのー蓮の杖掃除
玉ゆーの毒とあぬ茶を向柳
盧兆 銀巴 蘭里 紫滴 籬窈 杜良 疊雪

藤尾草を竿乃志持くのほろろ
手つたあやをゆま柳の刻に物
中川の新とゆまつらゆやを
漢村も縁つち西氏の燈籠うぬ
蓮芋茎の建須美のかくれ
毒照るやふあ〜みと〜美の指
ひととら香も鬚馬魂まつ
よく毒や草の糸紐の日向柳
魂柳や馬市やうーかひつと
文周 永里 猪鶴 永路 永尾 永丈 十花 貞孚 且中

ふらびる魂をひらき
あつちの花千屋一肉志ふはと
人あしくくは灯つとありあ
葉のふらふらとよとら
うりしはさかちるさゆふ
乃こ

花千屋口号

揚子江一板の隻の燈籠小

輝と名跡の著^善六つ^の表 湖十

川音の沈む冥下の絵引あ

男留さるは秤あつうふ

献立の及多ふまやふの由

袴はさきも不弱か

児と負う小横川をまの袖とふ

流石は角力旅の巻ん

悔はあましくひらき吐らまやさぬ

の海里一揃ふ業障とこ

あつちの馬井の一ら伝の花

新麻吹ふ小片言は奇

唱麻の奈良ふ晒の声と

涼下んさるはあま

口端をかりて
誇張す

口端の花似せぬの花
水石

○花大正
併し花大正とありし
花の香美百々句く
月の影ありて花大正
は傍題とあり玉の香に
際し浪の花を思はし
可加し花の影を思ひし

○旅伴三句者ニ句者
越不短あり云名あり
巻初三句者以上下して
見若しはまよふるこ
（平家物語）

いつ果敢て夢見る人ふつはく

八日よこめく星の二親

華火屋の目と流しる月の舟

酔はめをしく大なる伸ス

名
房ふよ一蝶民をす氣放

里本いさくを四景をこめ

のこくうの皷の目とあり張の袖

ちつてん今のは尻

情糸の教の市んえす捨り

う病の舟宿を包むゆき

平麓の前へ道ゆく坊主の妻

能書と浪むららよゆく如

屋根遠くこれぬ恨もぬんせと

中を多くと叫く賣貞の郷

馬の子る尻むりたふるうらあ

酒家よおしくかええぬふ

起ぬ一口名御旅屋者

あつたん一畫もあえぬ

上里や花女は極めはつるの心

若少くめつる月出者

先の唄
御一々つて
わう

遠く近く匂ふ寺前のこの通り
いづくも摘みたる果はひろまる

遠く火を物をもふ新葉の匂
魂柄や耳葉よめえ夜乃蝉
遠く火を物をもふ新葉の匂
全 全 湖十

享保十五庚戌初秋

彫工 吉田次郎兵衛

